

氏名	本多紀朗	
学位の種類	博士(芸術)	
学位記番号	甲博制第36号	
学位授与の日付	平成26年3月22日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)	
学位論文題目	彫刻作品における生命感	
作品テーマ	彫刻作品における生命感	
論文題目	彫刻作品における生命感	
論文審査委員	主査 教授	小田 信夫
	副査 教授	石井 元章
	副査 教授	伊藤 隆
	副査 教授	坪田 政彦

内容の要旨

学位申請者の本多紀朗の審査提出作品は計8点である。その作品すべてが塑像であるが内容的には幅の広いものである。それは成形素材を粘土によるものだけでなく、彼の特徴を示す様にロープなども使用し、多分に技法的に中間素材(一般的に粘土→石膏→ブロンズが塑像制作の通例であるが、この石膏に当たる部分を中間素材と呼ぶ、因みにブロンズとなった状態を最終素材とする。)によるものであり、それらを直に組み合わせて成形する通常直か付けと呼ばれるものである。そしてこのモデリングの技法の中に、カービング的な手法を多々取り入れ独自のフォルムの形成を成している処である。こうして具現化された作品群は素知らぬ顔で雄弁にして、作品を見る者達に具体的に語りかけて居る様に思える。次に本多君が論文を要約したものを記する事とする。

私は、彫刻作品において「生命感」を重視している。なぜならば「生命感」は、作品に魅力を与える大きな要素であり、作家の個性や思い、生き様の表れであるからである。本稿では、作品に魅力を生み出す「生命感」とは何かを考察したい。私が強く惹き付けられる作家に、イタリアの彫刻家マリーノ・マリーニ(Marino Marini, 1901-1980)と日本の彫刻家柳原義達(1910-2004)がいる。私が彼らの作品から「生命感」を感じ、大きな影響を受けていることは確かであ

な研究活動の態度は、彼の人間性よりもたらされるところの人々への愛情の深さや彫刻への憧憬の大きさに由来するものと考えられ、私など到底まねのできるどころではなく、大いに感心させられたものである。

次に作品について述べる事とするが、審査の対象となる作品は8点であり、彼の数多くの作品より厳選したと思われる。その全てが塑像であるがその作品内容は幅の広いものである。単に土付けによるものだけでなく、材料にロープを使用した作品や金属などをそのまま組み込んだ直か付け作品等もある。その手法はモデリングだけでなく時としてカービングにも及び、その多彩な表現を実現しているのである。それは彼の制作研究の内容に基づくものであり、ただ塑像の研究制作だけを続けてきたのではなく、技術的にも石彫や金属彫刻等にもそれは及び、その成果としてこの作品群に結晶したと考えられるものである。この塑像の多種多様な技法の広がり、単に制作上の技術研究課題として取り上げたものではなく、提出論文『彫刻における生命感』の第三章にも述べられており、ここに起因することが明白である。本質的な形態の中に生命感を希求する本多君の制作者としての極めて自然な制作姿勢がここに現れている。この制作研究と論文との両立を成功させ得た彼の後期課程に於ける研究は大いに認められるところである。

そして、彼の計画的な発表活動も順調にその成果が認められ、全関西美術展（主催・大阪市、後援・読売新聞大阪本社、大阪市立美術館）には2003年より出品し、第二席、第一席、第三席、読売新聞大阪本社賞と各賞を総なめにし、2012年よりは招待作家（一般的には会員）として認められた。一方、2006年より出品した二科展（主催・公益社団法人二科会、後援・NHK厚生文化事業団、国立新美術館）では、まずその地方展（大阪市立美術館、京都市立美術館）で数々の受賞をした後、二科展本展（国立新美術館）に於いても2011年に彫刻の森美術館賞、2012年に特選、2013年には二科会友にも推挙され、その制作活動は十分に認められるところとなったのである。その他にも第二十二回国民文化祭・とくしま・2007・野外彫刻展（主催・文化庁、徳島県）で徳島県教育委員会教育長賞を受賞した。このように作家としての活動において、彼の研究態度は貧欲でしかも真摯であり、評価に値する。その制作実績について学内は言うに及ばず、学外に於いても十分なる評価を得ているため、学位の資格取得は当然と考えられる。

なお、論文は、具体的明快に研究内容が表現されている。作家研究については取り上げた作家の選をはじめ、その生き様などその着眼点等は彼自身の作家たることに由来する。よって学位請求論文として十分に値するものと認めるものである。

論文指導副査の石井元章教授の査読講評は次のとおりである。「本来「停止した瞬間」を表す美術作品に動きに基づく生命感を盛り込もうとする考え方は、古代ギリシア以来連綿とヨーロッパ美術が目指してきたものである。ファラオの持つ絶対的な王権を静的な形体の中に表象するエジプト美術を範に取りながら、それと全く逆の方向に美術を進めようとしたギリシア人

は、その後のヨーロッパ美術の核心を決定づけたと言ってよい。『彫刻作品における生命感』において学位申請者本多紀朗は美術作品の本質に関する根源的なこの問いに対する答を自らに引き寄せて模索し、ヨーロッパ美術とは異なるにしても自らの答えを魅力ある作品作りに生かしたいと考えている。その点をまず評価したい。この答を明らかにするための手段として申請者は、強い影響を受けた日伊2人の彫刻家、マリーノ・マリーニと柳原義達を取り上げ、具体的な作品に現れた彼らの生涯の軌跡を辿る。その後、自らの作品に照らし合わせ、現在までの反省の上に立って、作家として進むべき道を規定しようとする。細部においてこれらの議論がしっかりと噛み合っていない憾みはあるが、大枠においてその方向は間違っていない。総じて、博士論文として十分な評価を与えうると考える。

また、制作指導副査の伊藤教授は報告書に次のように述べている。「作品について：博士後期3年間での作品内容は向上し、二科展に於いて「彫刻の森美術館賞」「特選」等を受賞し外部評価も高く、研究内容としては十分に妥当であり、完成度も高い作品である。特に2013年に制作した〈出立ち〉は、スケールの大きさと力強さが表現され、作者の彫刻作品に対する研究と意気込みを感じる作品に仕上がっている。芸術制作博士としての、資格を認定すべき水準であると考え。次に論文に付いて：「彫刻作品における生命感」と言う題目で、イタリアの彫刻家マリーノ・マリーニと日本の彫刻家柳原義達作品を通して、彫刻作品にある「生命感」についての研究を行った。作家の生き様、思い、制作姿勢等が作品に「跡」として残り、そこから発せられる「生命感」についての彫刻作品研究がしっかりと表現されている。本多紀朗の制作論文は、芸術制作学位（博士）論文に十分に値するものと認定いたします」。

最後に制作指導副査の坪田教授は審査報告書に次のように述べている。「学位題目、彫刻作品における生命感と題し本多紀朗君が取り組んだ作品群は質量共に申し分ないものであった。彼のテーマである生命感を重視しての研究作品は二科展出品等によりかなりの評価を受け、独特な表現はオリジナリティに突き進む姿勢に好感が持てる。又、作品発表略歴にも展覧会、受賞と申し分ないが何より社会活動も積極的に参加していることは博士の条件を満たしている。さらに論文題目も作品テーマ同様、彫刻作品における生命感であるが彼が惹き付けられるイタリアの彫刻家マリーノ・マリーニと日本の柳原義達に焦点を当て、かなりの苦戦をしていたが石井元章先生の粘り強い指導で一応の成果を得られ、発表に至ったことも評価し、制作、論文共に博士として、優れたものとする」。

結論として、審査委員全員が学位申請者本多紀朗の提出作品及び論文について、学位申請論文に十分値すると認め合格とする。